新潟県立近代美術館だより
Autumn & Winter 2015

雪椿通信

vol.45

2015年度後半期の企画展

館長　徳永健一

9月12日から11月3日まで、「会田誠展 ―ま、Still Alive って こーゆーこと」が開催されます。当館の今年一番の話題展になることでしょう。会田誠は1965年に新潟市に生まれた日本を代表する現代美術作家です。1991年に東京藝術大学大学院美術研究科を終了後、ヨーロッパ、アメリカ、アジアと世界各地で個展を開催しました。昨年はフランス・ナント市で《考えない人》などを出品し話題をよびました。今回の展覧会では彼のライフワークとも言える巨大なダンボール作品《モニュメント・フォー・ナッシングⅡ》を中心に、今日までに至る新しい会田誠の世界を紹介します。“Still Alive（まだ生きている）”?とは彼特有の斜に構えた物言いですが、会期中のかなりの期間会場につめて作品を制作すると言っておられます。今まで発表した作品や発言から様々な風当りの強い人物像が作り上げられてきました。会場でぜひとも素顔の会田誠に会って感じていただきたいと思います。

11月14日から来年1月17日までは、「生誕100年　亀倉雄策と『クリエイション』」を開催します。この展覧会は万代島美術館で7月11日から8月30日まで開催されている「生誕100年　亀倉雄策展」と対になる展覧会です。グラフィックデザイナー亀倉雄策が責任編集を務めたデザイン誌『クリエイション』。亀倉の生誕100年を記念し、晩年のライフワークとなった『クリエイション』と、誌上に取り上げられた個性豊かな作家たちの作品を紹介するとともに、亀倉のデザイン観や本誌にかける想いを探る展覧会です。クリエイションの創刊号で亀倉は次のように書いています。「私のデザイン誌をつくりたいということだけである。私の考えるデザインの本質と哲学。私の感性によるデザインの芸術性。芸術家の個性の輝きをとらえ、誌面の上に、私自身の手によって構成する。その構成が私のデザイン論だということが出来よう。私はこの本では決してニュースを扱わない。だから時流に媚びない。古くても新しくてもいいものはいい。デザインの本道でも、脇道でも、路地でもいい。有名も無名もない。優れた才能と芸術家としての力量を重視するだけである」。亀倉の眼と選ばれた作品によって“デザインとは”を追求する展覧会です。

3月5日から年度を超えて5月15日までは、「思い出のマーニー×種田陽平展」を行います。

昨年上映されたジブリ映画「思い出のマーニー」で美術監督を務め、海外映画監督からも絶大な信頼を得ている種田陽平。本展では物語の舞台である「マーニーがいる世界」を物語に登場する小道具やディテールにこだわった装飾で徹底的に再現、映画の世界をありのまま体感できる展覧会です。

この展覧会には今検討を重ねていますがさらにビッグな＋αを考えています。楽しみにして下さい。

©2014 GNDHDDTK

ヴァロットンの小さな仕事 －版画と書籍を中心に

第3期（前期）9/3～10/4

スイスに生まれ、パリで活躍した画家・版画家フェリックス・ヴァロットン（1865－1925）は、今年生誕150年を迎えます。日本での知名度はあまり高くはありませんが、ジュール・ルナールの自伝的小説『にんじん』の挿絵の作者といえば、思い出す方も多いことでしょう。白黒で表された、「かわいい」と「こわい」がないまぜになったような作風は、一度見たら忘れられない独特の魅力を放っています。

今回の特集では、ヴァロットンが手がけた書籍や雑誌の仕事に注目します。芸術家と社会が切り結んでいた時代の面白さを、ぜひご堪能ください。

（学芸課長代理　平石昌子）

ジュール・ルナール著
『にんじん』（1902年刊行）
挿絵より
ヴァロットン《にわとり小屋》

『ラ・ルヴュ・ブランシュ』第68号1896年
ナタンソン兄弟によって1889年にベルギーのリエージュで創刊され、2年後にパリに拠点を移して1903年まで発行された前衛的な文芸誌。ヴァロットンは同誌のために挿絵を制作した他、美術批評も寄稿しています。

「ま、Still Aliveって こーゆーこと」とは、新しい会田誠さんに会えるということ。

いよいよ会田誠展が間近に迫ってきました。会田誠さんは日本を代表する現代美術作家です。最近では国内外の大きな活躍が目立つようになりました。例えば、2012年11月には東京・森美術館での大規模回顧展「会田誠・天才でごめんなさい」。現代美術の展覧会では前人未踏とも言える約49万人の観客を動員しました。2013年には第8回安吾賞を画家として初めて受賞し、2014年にはナントのブルターニュ公爵城と鹿児島の霧島アートの森での個展を開催しています。今年に入っても、1月までフランスのアーティスト、ソフィ・カルさんとの2人展を香港で開催、2月にはMOA美術館の「光琳アートー光琳と現代美術ー」に出品、当館の展覧会と前後して、東京都現代美術館でのグループ展「おとなもこどもも考える　ここはだれの場所」に、なんと会田さんと奥様・岡田裕子さん、そして長男・会田寅次郎君の家族3人で参加。当館の展覧会をはさんで、10月にはフランスで開催される、高橋コレクションによる展覧会にも出品される予定です。

そのため、展示作品が重なることも多く、一時は代表作である《紐育空爆之図》（戦争画RETURNS,1996年）がフランスへの貸出しと重なってしまい、展示が危ぶまれましたが、ご所蔵家のご理解と会田さんやミヅマアートギャラリーのご協力で、何とか展示できることになりました。

▲長岡造形大学で《モニュメント・フォー・ナッシングⅡ》の参加を呼びかける会田誠さん

◀会田誠＋21st Century Cardboard Guild《MONUMENT FOR NOTHING Ⅱ》2008年～
制作風景：会田誠展「世界遺産への道!!」、鹿児島県霧島アートの森、2014年
写真提供：鹿児島県霧島アートの森
©AIDA Makoto　Courtesy Mizuma Art Gallery

会田誠《紐育空爆之図（にゅうようくうばくのず）》
（戦争画RETURNS）1996年
零戦CG制作：松橋睦生　撮影：長塚秀人　高橋コレクション蔵
©AIDA Makoto　Courtesy Mizuma Art Gallery

さて、会田さんの作品の中には、とても先鋭的で挑発的な作品があります。これらの作品には、見かけ以上の、会田さん流の骨太で強くがっちりした、皆さんに伝えるべきメッセージが含まれています。しかし、鑑賞される方の多くが会田さんの根源的なコンセプトにまでたどり着けず、その描かれた表層だけの領域で作品を評価してしまいます。そのため、時としてその奇抜な表現だけが話題となり、一部で批判されることも少なくありません。

そこで、今回の展示では、なるべく会田さんの本質的なコンセプトを理解してもらえるような、そんな基準で作品を選びました。もちろん、会田さん自身とミヅマアートギャラリーのスタッフの方々、そして当館で、出品作品をセレクトをし、みんなで展示構成を行いました。会田さん自身「ぐっと禁欲的な展覧会」であると述べています。

そんな新しい会田誠ワールドが展開する、この展覧会の目玉の1つとして、「僕の生涯で唯一かと思われる、多数の人々の手作業と長い時間を必要とする大型企画」と会田さん自身が述べるほど、時間と手間を要した巨大なインスタレーション《モニュメント・フォー・ナッシングⅡ》があります。日本の各地を5年以上転々としながら、どんどん増殖してきた本作は、この新潟県長岡市で最大規模になりました。しかし、実はまだ完成しておらず、本展覧会開催中に会田さんがワークショップを主宰し、お隣の長岡造形大学の学生さんを率いて、さらなる巨大モニュメントへと変貌させます。また、同時に、いろはカルタをモティーフにした木版画による新作インスタレーション《いろは》も、会場でほぼ毎日※、制作すると会田さんは言っています。

そう、会期46日間中、30日以上会田さんは当館にいるのです。1日美術館にいれば、どこかで会田さんに会える可能性は高いと思われます。その意味では、会田さん自身も展示の目玉の1つと言えるかもしれません。

「ま、Still Aliveって、こーゆーこと」とは「オレはまだ生きているぞ。がんばっているぞ」ということです。この秋、美術館でがんばっている会田誠さんに会いにきませんか？

（学芸課長　藤田裕彦）

※9/28～10/13会田誠さんはおやすみです

私とこの一点

中村木子（ぼくし）《崔顥詩黄鶴楼（さいこうしこうかくろう）》

中村木子を追い続けて20年。その木子の作品を昨年度、塚本惣右衛門氏と順一氏から合わせて5点御寄贈いただき、展示できることとなった喜びはこの上ない。しかも、本作は調査の中で発見した戦後50年代の展覧会出品作であり、感慨も一入（ひとしお）なのである。

木子を知る人は少ない。しかし、戦後の書の革新が図られた時、その先鋒となった新潟県人が柏崎の江口草玄と佐渡の木子だった。草玄氏は現在も作品発表をされておられるが、木子は、昭和48年（1973）5月に亡くなり、その上、制作時期も31年（1956）末頃までが主な活動時期であり、既に60年経ち、作品の所在確認も容易ではない。本作の制作当時、木簡の運筆を取り入れた書が多く書かれるが、軽く打たれたゝや鳥の四点などの軽妙さと、斑に掠れる筆線の妙味に、新しい書を模索した時代の息吹が窺われる。翌27年（1952）正月には、既成の書壇と訣別するため師の上田桑鳩とも袂を別ち、より先鋭的な制作を始める胎動期の作品と言えよう。新潟県の書人の記録を留めていく好作品だ。

なお掲載図版は、調査時点での写真のため影もあるが、表装を仕立て直して10月6日からコレクション展示室で初お披露目する。疾走した木子の50年代の息吹の一端をご覧いただきたい。

（専門学芸員　松矢国憲）

中村木子《崔顥詩黄鶴楼》
昭和26年（1951）
第四回書道芸術院展出品

亀倉雄策責任編集。『クリエイション』の世界

グラフィックデザイナー亀倉雄策（1915-1997）が生まれて今年で100年を迎えます。記念すべき年を迎え、改めて亀倉の業績を振り返る催しが各地で開催されています。万代島美術館でも企画展が開催されたばかりです。亀倉といえば、1964年の東京オリンピックの一連のポスターや、NTTのマークなど傑作の数々が思い起こされますが、彼が晩年に責任編集を務めたデザイン誌『クリエイション』もその偉業の一つと言えるでしょう。

『クリエイション』は1989年より5年間にわたり株式会社リクルート（当時）より発行された、世界のグラフィックデザイン、アート、イラストレーションを紹介する雑誌です。144名にものぼる作家、その作品の選出から誌面構成に至る工程全てが、亀倉自身の手によって行われ、1ページごとに緊張感のある画面が展開されます。亀倉自身が創刊1号で「その構成が私のデザイン論」と述べたように、1冊1冊に亀倉の感性、哲学が詰まった『クリエイション』。企画展「生誕100年 亀倉雄策と『クリエイション』」で、その世界にふれてみてはいかがでしょうか。

（主任学芸員　伊澤朋美）

『クリエイション』1号　1989年
リクルート発行

Catalogue Guide

時を紡ぐ、ゆたかに語る 絵本と絵巻

| 会期 | 1999年4月24日（土）～1999年5月23日（日）

古代から、物語を描くことに長けていた日本人。これが大きく花開いたのは、平安時代のことです。以来、脈々と物語は絵の中に取り込まれてきました。

「絵本と絵巻」。この展覧会が開催されたのは、折しも、スタジオジブリのアニメーションが話題になり、絵巻物とアニメーションの類似性が注目されて「絵巻物―アニメの源流」という展覧会が千葉で行われ、脚光を浴びた年でした。これはもちろん、偶然。展覧会期も当館の「絵本と絵巻」の方が早かったのですが、アニメーションの方が圧倒的に話題性があり、喰われてしまった気分になったものです。

でもね、絵本と絵巻の類似性も、なかなか捨てたものではないのです。日本の絵本には、たとえ無意識であろうとも、少なからず絵巻のエッセンスが入ったものを、多く見出すことができます。めくって一場面ずつ見るはずの画面を、横に並べてみると、それがわかります。絵巻物の細長い図版もできるだけ途切れないように掲載し、絵の連続性を見渡せるように工夫した一冊です。

（学芸課長代理　宮下東子）

とびまわる学芸員

暑い 熱い 鑑賞教育指導者研修

連続猛暑日を更新中の暑い東京、東京国立近代美術館と国立新美術館を会場にした鑑賞教育指導者研修に参加してきました。全国区の著名な講師による講演会は「なぜ鑑賞教育を大切にしなければならないのか」の問いに対する明確な回答で胸に「ストン」と落ちる感覚を味わえました。さらに、北海道から九州までの日本全国から集まった約100名の美術館、学校、行政の方々と「鑑賞教育」や「美術館と学校の連携」の成果や課題について何時間も語り合うことができたことも大きな財産となりました。この研修の成果を少しでも当館の今後に役立てていけたらと思います。空調がしっかり効いている最高の会場でしたが、それ以上に熱い研修が行われた2日間でした。

（副参事　宇賀田和雄）

近美のおすすめ

こんにちは。今回は当館の内装に使われている「石」を紹介します。

まず、エントランスをぐるっととり囲んでいる大きな太い柱は、表面に緑色の大理石を貼りつけたものです。よく、「これは本物？」と感触を確かめられるお客様がいらっしゃいます。

次は、床や壁などに多く使われている御影石です。使用場所により表面の仕上げ方が異なるので、同じ石ですが表情が様々です。

最後に、私の一番のおすすめ！展示室へと続く「豆砂利の洗い出し」の道です。この工法はとても手間のかかるもので、熟練の技がないと美しく仕上がらないそうです。少し昔の技法のせいか、ここを歩くと懐かしいような感覚がしてきます。

ぜひ、石の表情にも目を配ってみてください。涼やかな気分になれますよ。

（嘱託員　風間佳代子）

お世話になってます シリーズ その7

ホワイトボード

当館の講堂は、一般の方々にも貸出しております。皆さんは、ご存じでしたか。

利用の一番は、「ピアノ発表会」です。

来館者の皆さんに開場・開演時間などをご案内するために、この「ホワイトボード」に掲示しております。正面入口に「ホワイトボード」があるときは、講堂でイベントを行っております。多くが無料イベントなので講堂まで足を運んでみてください。

（総務課　小林史子）

編集部からのひとこと

36号から始まった「近美のおすすめ」コーナーでは美術館で働く職員に、それぞれの館の薦めたいモノをリレー形式で紹介してもらっています。おなじみの場所から、意外なものまで、美術館“通”の視点で様々な“おすすめ”が紹介されています。企画展・コレクション展とあわせて、おすすめ巡りも楽しいかもしれませんよ。

（主任学芸員　伊澤朋美）

新潟県立近代美術館だより　雪椿通信　第45号

編集・発行　THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL0258-28-4111㈹　FAX0258-28-4115
http://kinbi.pref.niigata.lg.jp/　e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp
制作・印刷　株式会社 山田写真製版所 〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14
発 行 日　2015年9月1日